

2020年4月19日聖学院教会聖日礼拝説教

「人生の大目標」

列王記上8：17－19

マタイによる福音書6：33

菊地 順

今日は、聖学院教会の創立44周年を覚える聖日です。1976年に開設されて44年が経過しました。この間、時の経過とともに、いろいろな変化がありました。何よりも、名前が変わりました。11年前に、緑聖教会から聖学院教会へと変わりました。場所も変わりました。鉄塔の下にあった緑聖教会の建物から大学の4号館4階の大教室へと移り、そして2004年の秋に、このチャペルへと移りました。また教会も、伝道所から第2種教会となり、さらに第1種教会へと成長しました。そして、主任牧師も変わりました。濱田辰雄牧師、東野尚志牧師を経て、この4月に赤田直樹牧師が着任しました。そしてまた、教会員も変わりました。その中には、天に召された方々もおられます。

時が経つということは、当然、物事が変化していくということです。私も、この教会に加えていただいて、28年が過ぎました。早いものです。おそらく、私たちは、誕生日を迎える度ごとに、自分の過去を振り返るのではないのでしょうか。そしてまた、残された人生へと思いを馳せるのではないのでしょうか。あれこれと思い起こしつつ、時には痛みを覚えながらも、また同時に、そのすべてを肯定的に受け入れていこうとするのではないのでしょうか。たとえ、そこにいろいろな痛みがあるとしても、です。そして、それは今日、この教会の誕生日を迎える中にあっても同じなのではないのでしょうか。この44年の歩みは、決して順風満帆ではありませんでした。振り返ってみると、何度か、危機とも言える時期がありました。そこには、牧師と信徒の不信という目に見えない危機もありました。しかし、そのすべてを乗り越えて今に至っています。これからも、いろいろあると思います。しかし、教会は前進し続けなければなりません。昨日も今日も働かれる神と共に、一つ一つの問題や課題を乗り越えながら、前進していかなければなりません。この度の新型コロナウイルスの問題もその一つです。こういう言い方は適当でないかもしれませんが、この問題は内から生じたものではありません。外から降りかかってきた問題です。その限りでは、内にあっては一致団結できる問題でもあります。また一致団結できる機会でもあります。さまざまなことに十分対処しながらも、また思いと業を一つにして、主の前に前進して行きたいと思います。

ところで、今日は、教会の誕生日を覚え、来し方を振り返る中で、それに関連する一つの説教を紹介したいと思います。それは、マーティン・ルーサー・キングの説教です。しばしばキングの話をして恐縮ですが、今日は、キングの一つの説教を紹介したいと思います。キングは、ご存知のように、39歳で暗殺されました。39歳というのは、何とも若い年齢です。

人生 80 年時代を迎えている現在から見てもそうですが、当時であっても、それは大変若い年齢でした。しかし、キング自身は、その年齢にして、すでに自分の死を自覚していたと言えます。自分の晩年を自覚していたところがあります。そして、今日紹介する説教は、暗殺されるちょうど 2 カ月前の礼拝で語られたものですが、その説教題は「実現せざる夢」というタイトルでした。キングは、ご存知のように、「私には夢がある」と語りました。そして、その夢の実現を目指して歩んだのが、キングの人生でした。しかし、キングは、そうした人生を総括するかのように、「実現せざる夢」との題で説教したのです。そのことを思うと、その説教題自体が、深く自分の人生の終わりを自覚した題であると言えるのではないかと思います。キングは、晩年、深い孤独と苦悩の中に置かれていましたが、そうした特異な状況の中であってキングの精神は鋭く研ぎ澄まされていったのかもしれませんが。そして、自分の死を鋭く予期していたのかもしれませんが。いずれにしても、キングは、39 歳で自らの人生を総括するかのような説教を行ったのです。

そのとき、キングが基づいた聖書箇所が、実は、先ほど読んでいただいた列王記上の言葉なのです。普段、皆さんは、この言葉にどれほどの親しみを感じているのでしょうか。しかし、キングは、ことあるごとに、この言葉を思い起こし、この言葉に立ち返ったと語っています。そのところを、もう一度お読みします。「父ダビデは、イスラエルの神、主の御名のために神殿を建てようと心掛けていたが、主は父ダビデにこう仰せになった。『あなたはわたしの名のために家を建てようと心掛けてきた。その心掛けは立派である。しかし、神殿を建てるのはあなたではなく、あなたの腰から出る息子がわたしの名のために神殿を建てる』と」。これは、神殿建設について、神がダビデ王に語ったことを、息子ソロモンが思い起こして、語っているところです。父ダビデは、神のために神殿を建てようとしていました。しかし、その志は実現しませんでした。それを実現したのは息子ソロモンでした。ですから、神殿を建てようとの志から言えば、ダビデは、言わば挫折したわけです。その夢は実現しなかったわけです。しかし、ソロモンを通して語られたこの神の言葉には、重要な一言が添えられています。それは、「その心掛けは立派である」との言葉です。聖書協会共同訳では「その志は立派である」と訳されています。ダビデは、神殿を建てようとして志しましたが、それを達成することはできませんでした。しかし、神は、「その心掛けは立派である」と語られたのです。そして、それを良しとされたのです。神殿を建設するという志は実現できなかったけれども、そう志したことは立派である、良いことであった言われたのです。夢を実現することはできなかったけれども、そう志したことは立派であった、良かったと、神は語られたのです。キングは、そこに注目するのです。そして、そこから、自分の人生を振り返るのです。自分も一つの大きな夢を見て歩んできたけれども、未だ実現していない。実現していないどころか、そこには多くの挫折と痛みと苦悩がある。しかし、その苦悩の中で、キングは、この神の言葉を聞くのです。「その心掛けは立派である」と。それは、今までの自分の歩みは間違っ

こそが大切なのだとの声を聞くのです。そして、キングは、このみ言葉から、神は私たちの「生全体」を問題にされているのだと語ります。神は、個々の具体的行為の成功・不成功ではなく、私たちの生き方全体を問題にされているのだと語るのです。簡単に言えば、私たちの生活がどの方向を向いているのか、それが大事だと語るのです。神殿を建てようと心掛けているのか、そうでないのか、それが大事だと語るのです。そして、たとえ現実にはそれに失敗し、挫折し、実現しなかったとしても、神殿を建てようと心掛けていたならば、その方向にちゃんと向かっていたならば、それで良いのだと言うのです。神は、それを良しとされ、受け入れてくださるのだと語るのです。問題は、ちゃんと目指すべき目的に向かっているかどうかなのです。その目的に至る道にちゃんと乗っかっているかどうかなのです。そこが大事だと言うのです。青森に行くためには、東北自動車道に乗らなければならないのです。東名高速に乗ってはだめなのです。ちゃんと目的地に通じている道に乗らなければならないのです。そして、その道に乗っているなら、その道中で何かが起きても、それが決定的な問題ではないのです。決定的な問題は、どの道に乗っているか、なのです。そして、そこを、神はご覧になっておられるのです。そして、ちゃんと目指すべき道に乗っていれば、「その心掛けは立派である」と語ってくださるのです。良しとしてくださるのです。もっと言えば、義としてくださるのです。

私たちが、罪が赦されて義とされたと言う場合、そこで言われていることは、ちゃんと神の方向に向かっている、神に至る道に乗っているということなのです。ですから、その歩みの中にある一つ一つの行為が問題とされているのではないのです。行いとしては、失敗もあるでしょう。うまくいかないこともあるでしょう。しかし、その一つ一つを取り上げて、それを罪と呼んでいるのではないのです。罪というのは、神に至る道にちゃんと乗っていないことなのです。ちゃんと乗っていれば、神はそれで良しとしてくださるのです。たとえ、その中に失敗や挫折があるとしても、良しとしてくださるのです。ですから、私たちは、あまり個々の行為に拘泥してはならないのです。一つ一つの行為を捉えて、それを完璧に行うことができたから義である、できなかったから罪であると言ってはならないのです。そうした言い方は、ひっくり返して言えば、自分の行為によって義とされることを目指す歩みになってしまいます。それは、カトリック的な生き方です。カトリックでは、罪を大罪(大きな罪)と小罪(小さな罪)に分けて考えます。それは、行為に基づいて考えるからです。しかし、プロテスタントでは、罪は一つです。それは、個々の行為ではないからです。宗教改革者のマルティン・ルターは、罪は一つであると言いました。そして、その一つの罪とは、不信仰であると語りました。神に向かっていないこと、神に至る道の乗っていないこと、それが不信仰であって、罪であると語ったのです。ですから、問題は、ちゃんと神に至る道に乗っているかどうか、なのです。私たちの存在がどこに向かっているかが問題なのです。そして、神に向かっていれば、それで良いのです。問題は、行為ではなく、存在なのです。

ただ、私たちの中に、未だ罪があることも確かです。神から離れて好き勝手に生きようとする肉なる思いが潜んでいるのも確かなことなのです。神に呼び出され、神の子とされ、神

に生きる信仰を与えられていながら、私たちの内には、なお神から離れようとする肉の思い、罪の力が働いているのです。ですから、絶えず悔い改めて、神に立ち返ることが大切なのです。ちゃんと神に至る道に乗り続けることが大切なのです。

キングは、多くの挫折と苦悩の中で、「その心掛けは立派である」との神の声を聞いたのです。自分を良しとしてくださる、神の声を聞いたのです。キングは、一方では、偉大な社会的指導者として名を馳せましたが、その歩みは苦悩の連続でした。また、個人的生活においても、女性問題などがあり、一人の人間としても多くの欠けを持っていました。しかし、キングは、自分を良しとしてくださる神の声を聞いたのです。「その心掛けは立派である」との声を聞いたのです。そして、私たちもまた、この声を聞くことが許されているのです。また、許されているだけではなく、それを聞かなければならないのです。「その心掛けは立派である」との声を聞き、改めて、私たちの心を神に向けていかなければならないのです。

濱田辰雄牧師夫妻がこの3月を持って聖学院教会を去られたということは、教会にとって、実質的にも象徴的にも、大きいことだと思います。この教会の初代牧師であり、44年間共に礼拝を守ってきたお二人が去られたということは、存在自体に、大きな欠けが生じたということです。そして、それ以上に、一つの時代の終わり、新しい時代の始まりを象徴する出来事であると思います。しかしまた、教会には、一貫して変わらないものがあることも、また確かなことです。濱田牧師は、最後の挨拶文の中で、私たちに一つのメッセージを残してくださいました。それが、先ほど読んでいただきました、今日のもう一つの聖書箇所です。そこにはこう記されています。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」。主イエスは、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」と命じられるのです。これこそが、私たちの人生の大目標です。この大目標に、私たちの人生は向かっているでしょうか。神の国とは、神の支配です。私たちは、神を信じ、神を見上げて生きているでしょうか。あのこと、このことに捕らわれて、神を見失ってはいないでしょうか。あるいは、自分の思いや欲望に振り回されて、身勝手な生き方をしてはいないでしょうか。ダビデは、サウル王に命を狙われ、窮地に立たされたとき、「わたしの心は定まりました」と告白しました。神へと心を定め、神への揺るぎない信頼に生きたのです。そして、そのとき、ダビデは神の義をいただくことができたのです。私たちも、このことが大切なのです。神へと心を定めていなければならないのです。神の国を求めていなければならないのです。神への信仰に生きていなければならないのです。そのとき、私たちも、神の義に与っていくことができるのです。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」。この人生の大目標に向かって、私たちは改めて心一つにし、思いと業一つにして、45年目の新しい一年を神と共に歩んでいきたいと思ひます。